

IDACAだより

第 11 号 平成 26 年 2 月 5 日

● 編集発行
(一財)アジア農協振興機関
責任者：平岡啓治
東京都町田市相原町 4771
TEL: 042-782-4331
FAX: 042-782-4384

新たな年へ向けて

新年にあたり年頭のご挨拶を申し上げます。

昨年 11 月、南アフリカのケープタウンにおいて、2 年に一度の ICA 総会が開催されました。私は、農林漁業、消費者、金融、共済、医療福祉、労働者など日本の協同組合セクターの代表として ICA 理事に立候補し、組合員のために多様な事業を行う JA グループの代表として広範な事業に精通した経験をもとに世界の協同組合間連携を推進していく決意を訴えました。その結果、各国からの幅広い支持をいただき、当選いたしました。この背景には IDACA がアジアを中心に世界における協同組合運動を担う人材育成を通じて国際社会における連帯性を育ててきた 50 年の歴史が認められたことによるところが多いと感じております。



IDACA 代表理事 萬歳 章

協同組合運動を通じた国際社会の連帯性と相反する動きがグローバリズムです。環太平洋連携協定 (TPP) に象徴される新自由主義によるグローバル化は競争と市場原理によって、分配より独占、均質化より格差を追求するもので、組合員による所有・経営・利用、良好なガバナンス、民主主義、透明性と説明責任、非営利性、長期的なアプローチといった協同組合思想とは相容れない価値体系です。協同組合は世界に共通する組織形態で、この特色を生かし、食料産業の資本集中や貿易自由化、規制・基準の一律化といった流れに対抗していくことがますます重要になっております。そのためには日本の広範な国民各層との連携のみならず、全世界の協同組合ネットワークを通じた取り組みも重要になってきます。

今年は、こうした農家・農村・地域を衰退させる流れに対抗する、強靱な協同の潮流が強まるよう、私どもの事業・運動をすすめてまいります。
(次ページに続く)

《目次》

| | |
|---------------------------|---|
| ● 新たな年へ向けて (代表理事挨拶) | 1 |
| ● I & YOU 倶楽部臨時総会報告..... | 2 |
| ● 研修事業報告 | 3 |
| (1) ASEAN キャパシティビルディング研修 | |
| (2) JICA 農業政策企画研修 | |
| (3) ICA 農村女性地域活性化支援研修 | |
| ● 現地調査報告 | 6 |
| (1) ロシア巡回セミナー参加 | |
| (2) ザンビアの現状報告 | |
| ● 来館者報告..... | 7 |
| ● 編集後記 | 8 |

国連は、飢餓の根絶、自然資源の保全、持続可能な開発の促進に果たす家族農業の役割を評価し、2014 年を「国際家族農業年」と決めました。家族農業・小規模農業は多くの国の食料安全保障の基礎であり、すべての国の社会・経済・環境面で重要な要素を構成しています。その家族農業が、都市化ならびに市場の統合化・グローバル化の進行に伴って危機に瀕する状況になっています。その一方で「国際家族農業年」にあるように国際社会の政策課題は大規模・企業的経営優先から家族経営支援へと見直されつつあります。このことは一昨年の「国際協同組合同年」とあわせ、世界的にも農業や協同組合の価値が見直されていることに他なりません。

2014 年は「協同組合」と「家族農業」を両輪に、「農業・農村の多面的機能」としての価値を国民的共有認識にする活動が強まる年にしたいものです。

最後に、本年が皆様にとりましても、飛躍の年となることを祈念し、年頭のご挨拶といたします。



I & YOU 倶楽部臨時総会の開催

平成 26 年 1 月 31 日

故山内偉生会長が IDACA パーティーの席で披露されたギター演奏の映像が流れる中、参加者全員で山内さんのご冥福を祈って黙とうをし、I & YOU 倶楽部臨時総会は静かにスタートしました。

今回の議案は二つ。空席となっている会長の選出と新会員の承認でした。来賓として萬歳理事長 (JA 全中会長) をお迎えしご挨拶いただきました。

理事長はご挨拶の中で、

「I & YOU 倶楽部のメンバーの皆さんは系統各組織出身でなおかつ途上国での農協育成プロジェクト等に参加された経験をお持ちの方々です。IDACA の研修においては、日本の経験を途上国の視点で話ができることが最も重要で、そのような方々が I & YOU 倶楽部として組織的に IDACA を支援してくださることは心強い限りです。

私も昨年 11 月南アフリカで開催された ICA 総会で日本代表として理事に立候補し、選出されました。これまでの経験を踏まえ、協同組合の国際間連携と世界の協同組合運動の推進に

尽力する所存です。」と述べられました。

新会長には JA 神奈川中央会ご出身の気賀沢忠文氏が満場一致で選出されました。県中時代よりネパールで植林活動などを展開している



萬歳理事長を囲む I & YOU 倶楽部メンバーの皆さんと

IDACA 役職員。前列左から 2 番目が気賀沢新会長

また JA いわて花巻で理事をされている高橋テツさんが新会員として承認されました。I & YOU 倶楽部初の女性会員です。やはり JICA の専門家としてタイ国のプロジェクトに参加されタイの草の根レベルの生活改善に大きく貢献されました。

総会の後、I & YOU 倶楽部メンバーの皆さんと IDACA 役職員とで意見交換会を持ちました。皆さんの知識とご経験が今後の IDACA 研修事業に大いに活かされていくことでしょう。



＜研修事業報告＞

(1) 2013 年度 ASEAN キャパシティービルディング研修

「持続可能な地域農業振興のために～農業協同組合の役割および農家の協同活動の強化」

日本／アセアン農業分野におけるキャパシティービルディング強化事業による研修が平成 25 年 8 月 25 日から 9 月 11 日の期間、東京都、長野県および新潟県で実施されました。この研修は JA 全中とアセアン事務局の協力と農林水産省の資金拠出により IDACA が委託を受け実施しました。アセアン会員国のうちシンガポールを除く 9 か国から 20 名が参加しました。



新潟県朱鷺メッセで開催された農林水産省主催
日 ASEAN 友好協力 40 周年記念 食料安全保障特別セミナー



JA 松本ハイランド
すいか共選所視察

現地研修は長野県で開催され、JA ながの、JA 松本ハイランド、株式会社伊藤精麦（バイオマス）および長野県中信

平右岸土地改良区を訪問しました。研修員はさらに新潟県で開催された農林水産省主催の日本／アセアン友好 40 周年記念行事である特別セミナー「食料安全保障－水管理と持続可能な農業」にも参加しました。



先進的な施設よりも小規模施設に関心が…！

JA 松本ハイランド 営農部
野菜特産課 課長 中村 吉孝

平成 25 年 9 月 4 日に視察の受入対応をさせていただきました。

果実共選所、ライスセンター、すいか共選所、ワイナリーの見学のスケジュールを組みましたが途中見学スケジュールの時間が空いてしまい、ちょうど近くに JA ファーム（生産資材店舗）がありましたので立ち寄ることにしました。いずれの施設でも研修員の皆さんは熱心に視察をされていましたが、当初見学予定になかった JA ファームにおいては、小型の耕耘機、日よけ資材、野菜の種などに強く興味を持たれたようで、他のどの見学施設よりも多くの質問を受けました。

私たち受け入れる側としては、外国人の視察団ということで大規模で、立派で先進的な施設を紹介する傾向がありますが、生産者はどんな道具や機械を使い、気象変動にはどのような対策をしているか、といった、生産現場を紹介することも行程に入ればよかったと思いました。

アジア諸国の様々な気象条件、政治、宗教を背景とした研修員の皆さんと対話することで私自身も、多くのことを学習させていただきました。



JA 松本ハイランド山辺ワイナリー
にて伊藤組合長を囲んで

(2) 2013 年度 JICA「農業政策企画」研修

JICA より受託した「農業政策企画」研修は、アフガニスタン、エチオピア、インドネシア等、アジア、アフリカ、中近東地域から 15 か国 16 名の行政官が参加して実施されました。当機関での講義の後、現地研修では JA 秋田中央会の協力を受け、3JA (JA 秋田しんせい、JA こまち、JA 大潟村) での研修、JA 全農あきたの精米センター、関連会社のコープケミカルの施設見学、そして県農業試験場、県立秋田大学、集落営農の事例としての生産法人での研修の機会をいただきました。現地研修を通じて地域農業振興に果たす行政と農協組織の役割について学ぶことができました。

研修の最後に研修員はアクションプランの作成に取り組み、生産基盤、流通・マーケティング等の改善に関するプランを作り上げ、8月22日から始まった1か月の研修を終えました。



秋田県農業科学館を訪問して



「農業政策企画」研修を受け入れて

秋田県農業協同組合中央会
地域政策部 部長 淡路 保

私自身は JICA の研修受け入れは 3 度目となり、おおよそ研修先に対するオファーは理解したつもりで望んだ今回の「農業政策企画」研修会。アジア・アフリカ各国の農業政策を担う研修員 16 名は、筑波でのグリーンフィンギングやオリエンテーションを終え、日本の農業政策や JA の役割等について頭の中では十分に理解していたと思うが、初めて生産現場を直接訪れる機会となった。県の農業試験場や全農の施設に加え 3JA を直接訪れ、生の声を聞いた経験は大きかったのではないかと。

中央会での意見交換では、TPP についても積極的に意見交換でき、当方も貴重な経験となった。

なお、最も気をつかった当方での食事は、ホテルからビュッフェスタイルでお願いし、各国の事情に配慮したものであり、わずかばかりのオ・モ・テ・ナ・シを感じてもらえたなら幸甚である。



JAビル玄関にて

(3) 2013 年度ICA農村女性組織活性化支援研修

ICA の委託を受けて、地域を活性化する上で重要な役割を担う農村女性リーダーの育成を支援することを目的とした標記研修を平成 25 年

9 月 23 日から 10 月 18 日まで、アジア 8 か国から 11 名の農村女性担当行政官、協同組合役職員の参加を得て実施しました。

IDACA での農協組織や女性組織、農村女性の起業活動等の講義を受けた後、東京近郊の JA あきがわを訪問させていただき、実際に現場での活動を視察しました。また JA 女性部の皆さんと家の光の記事「浴衣の着付け」を使った交流会を持ちました。自分たちが着せていただいた浴衣のサプライズプレゼントがあり、研修員は大喜びでした。

現地研修は京都で実施しました。JA 京都中央会、JA 京都やましろ、JA 京都、JA 京都にのくになどを訪問させていただき、JA 女性部の皆さんと組み紐作成体験やお茶の淹れ方教室、お手玉作り、京野菜を使ったお料理教室等京都ならではの交流会を持ちました。



JA京都やましろ役職員・女性部の皆さんと

JA 関係者の皆さんや JA 女性部の皆さんの心温まるおもてなしは言葉の壁を越え、研修員に感動と日本に対する大変良い

印象を残しました。

研修員一同、この研修で得た知識や経験を自国の農村女性の生活改善や地位の向上のために活用していくとの決意を新たにしていました。



JAあきがわ女性部
部長 網野 愛子

私達にも印象に残った交流会

JAあきがわ女性部

「東南アジアの女性の方と交流して頂けないでしょうか？」というお話を頂いた時、受け入れられるだろうか？と不安を抱きながら、何をしてあげたら喜ばれるだろうか？と考えました。8 支部 24 名の役員が知恵を出し合い「日本に来ているのだから日本の文化に触れさせよう」という意見に「浴衣の着付けにしよう」と決まりました。

当日は朝早くから集まり受け入れ準備。不安と期待の中、待っているとバスから降りてくる皆さんの笑顔でこちらも笑顔になりました。言葉が通じなくても身ぶり手ぶりで教えているのに覚えるのが早いことに驚きました。色とりどりの浴衣美人と一緒に記念撮影、踊りを踊り、浴衣をプレゼントした時の皆さんの驚きと喜びの顔によい「おもてなし」が出来たかなと感じました。短い時間でしたが有意義な交流でとても名残惜しかったです。またお会いしましょう。



家の光を使った浴衣着付け教室を開催
JA役職員、女性部の皆さんと交流

 < 現地調査報告 >

(1) ロシア巡回セミナーに参加

IDACA 海外協同組合開発コンサルタント

照 昭 弘

ロシアにある日本センター（モスクワおよびサントペテルブルク）の主催で、日本の農業協同組合の経験に関する巡回セミナーが開催され、日本からは私が講師として参加するため、平成 25 年 7 月 1 日から 12 日までロシアを訪問しました。

セミナーはリペツク州、クラスノダール州、スタブロポリ州およびサントペテルブルク州で開催されました。ロシアは 1992 年の革命以降、それまで農業生産の大部分を担っていたコルホーズ（協同組合農場）とソホーズ（国営農場）が解体され民営化が進められました。



リペツク州でのセミナー風景



玉ねぎ生産者組合の組合員(クラスノダール)

今ロシアでは外国資本スーパーの進出が活発で、青果物の輸入が増えています。1995 年に新しい農業協同組合法が施行されましたが、農家の中には農協の組合員（土地所有者）＝農協の職員というコルホーズ時代の構図がまだ残っていて、新しい農協のイメージや先進国の農協について正確に理解していない人が多いようです。

各セミナーでは活発な意見交換がなされ、他国の農協を研究して、早く自国にあった農協の組織・運営・事業スタイルを見つけだし、実践したいとの強い意向が表れていました。

(2) ザンビアの現状と農民組織活性化について

IDACA 海外協同組合開発コンサルタント

安部 幸男

当機関のレギュラー講師でもある（有）農業マーケティング研究所の山本和子代表からの依頼により、2013 年 12 月 11 日から 19 日まで、「アフリカ等農業・農民組織活性化支援事業」の一環として、事業評価を行うためにザンビアを訪問しました。

ザンビアは、ジンバブエ、コンゴ、モザンビーク、ボツアナ、タンザニア、マラウイ、ナミビア及びアンゴラの 8 カ国に隣接するアフリカの南部地域に位置し、面積は日本の 2 倍、



マイクロクレジットを利用している農家を訪問

人口は 1,347 万人で人口増加率は 4.2%と非常に高い。ザンビアから私たちが一般的に連想するのは、世界 3 大滝の一つであるビクトリアの滝と銅生産だと思えます。

事実、主力輸出品は今でも銅で、日本の 10 円玉にも使われているほどですが、長年、国際価格の低落により経済が低迷してきましたが、最近海外からの投資促進及び銅の国際価格上昇による銅の生産増大によって、経済は好調の様子でした。

そのため、首都ルサカには欧米資本のショッピングセンターやケンタッキーフライドチキンなどのファーストフードの出店が見られました。また、朝夕交通渋滞が起きるなど市場経済化が進んでいることも伺えましたが、いったん首都を離れると、風景は激変し、山岳地帯がないので、広大な農地が存在していました。ただ、耕地の有効利用がおこなわれておらず未使用の土地が多く見受けられ、南アなど裕福な近隣諸国



道路沿いのトマト露店販売



地方の農業生産資材販売店

からの農業投資が行われており、大規模経営による輸出向けのメイズ（とうもろこし）生産が営まれていました。一般農家の営農については、まだ機械化が進んでおらず、伝統的に牛耕しているトンガ族を除き、農民は天水による自耕に依存しており、多くの農民は貧困状態に置かれていました。それでも、気候や豊かな土地に恵まれ飢える心配がないせいか、農民は現状に甘んじているようにも見えました。一方で、IDACA の元研修員を含むルサカのエリート官僚達は、ネクタイを締めてパリットし堂々としていて、その大きなギャップになんともむなしさを覚えました。それは、旧宗主国の遺産ともいべき制度の残存がエリート層と貧困層の格差に表れているのではないかと感じた次第です。こうした意味において、本事業が「補助金に依存しないメイズ生産の多収化支援」を通じて、農民の「貧困緩和と生活向上」に貢献ができるのではないかと大きな期待が高まります。



< 来館者報告 >

> 台湾農訓協会視察団訪問

農訓協会と IDACA は教育・研修機関として、これまで 1990 年代から姉妹提携を締結し、相互交流を図ってきました。とりわけ、農訓協会は、海外研修の一環として、総幹事（JA の専務理事に相当）や部課長クラスの役員を対象に、その都度テーマを設定し、視察研修を実施してきました。ここ数年間は相互交流が停滞していましたが、2013 年 3 月、当機関の平岡常務及び安部



平岡常務理事より IDACA の事業概要を説明

海外協同組合開発コンサルタントらの訪台を機会に、再び交流が活発化し、農訓協会での話し合いの結果、視察研修が再開されることになりました。

今回の訪問では、「日本の有機農業の実態・先進的な取組」が中心テーマで、2013年11月18日から23日まで視察研修が行われました。視察

団の構成は、農訓協会秘書長の王志文団長以下、全国の農会総幹事及び役職員の21名で、視察団は滞在期間中、JA全中、IDACA及び千葉県下の林農園を訪問しました。特に、林農園では有機農法による耕畜連携による農場経営について学習しました。また、道の駅やファーマーズマーケットなどの視察訪問も行いました。

▶ ベトナム協同組合同盟 経済開発協力研究所(ICED)所長IDACA来館

ベトナム協同組合同盟(VCA)は、最近、国内外の教育・情報活動を充実させるため、傘下の経済開発協力研究所(ICED)の強化を図っています。

その一環として、今回、ICEDの所長であるグエン・チィ・トゥイ・アン女史が、IDACAとの意見交換と交流を深めることを目的として、9月10日、当機関を訪問しました。訪問の内容は、ICEDもIDACAも研修・研究機関であることから、「役職員の交流促進」や「教材や情報交換」等について検討するためです。

アン所長は以前、ご主人に同行して10年間程日本に滞在していたことがあり、いまでも日本語がかなり話せたので会話は日本語で行ったが細かい内容については、同行した桜美林大学で経済学を学んでいる親戚の息子さんが通訳を務められました。

所長は2011年にも日本を訪問し、愛知県下で

農産物と海産物を生産・加工販売する協同組合を視察して、「生産・流通方法」、「環境保護」及びこれらに関する「政府の施策」についての情報を収集しており、今後も継続して情報更新を図りたいので、IDACAに情報提供の要望がありました。

最後に、2013年10月後半、ICED主催の組合長を対象としたシンポジウムを開催する予定なのでIDACAからもぜひ講演者を派遣して欲しいとの要望があり、日頃、当機関の研修の件でお世話になっているVCAとも協議の上、同シンポジウムに安部海外協同組合開発コンサルタントを派遣しました。



編集後記

IDACA 設立から半世紀。時代の流れの中で研修員を取り巻く環境も様々に変化しています。20年ほど前まで研修員が滞在する部屋にはテレビがありませんでした。研修員はテレビが設置されていたロビーやステレオルームに集まり、ワイワイガヤガヤおしゃべりを楽しんでいました。各部屋にテレビが置かれ、ロビーに集まる研修員の姿は消えました。そして今やインターネット全盛の時代。講義の最中ですらパソコンや携帯をいじる研修員。瞬時にして情報を得られ、世界中の人と繋がることのできるインターネット。IDACA スタッフの意識も、もうこの人たちと二度と会うことはないかも知れない、この出会いを大切にしようという認識からいつでも連絡が取りあえる身近な関係へと変化しています。なかなか手に入らないから稀少価値があった物が手軽に安価で買える時代になったことと平行しているように感じます。

